

燈蓋にして、高きは高うし、低きは低うす、されど燈臺下くらしといふ諺もあれば、執行地に油断はなるまじと、みづからはを思ひて、夜座更行まゝに、油煙に鼻の穴をくもらし、筆を置ば後夜の鐘寝よと告ぬ。一句略十

〔嬉遊笑覽十下〕火燭ひじり行燈は諸艶大鑑、非寺里行燈の光をうけて、大かた隙日を暮しかねたる女郎云々、局みせのかけ行燈を云り、ひじりとは高野聖の笈めく故の名にや、又赤き紙にて貼たるは、もとたばこやの目印なり、艶道通鑑、通天の紅葉をいふ所、此里のたばこ賣が赤あんどんは、是よりぞ本づきぬらんとは、紅葉のてるをいふなり、こは近くまでさありしにや、六玉川二編、俵の夜の障子やたばこ廓などもみゆ、今も烟草やはかき色の暖簾かくるもおなじ目印なり。西瓜の赤あんどんも、これよりや出つらん、〇下略

〔守貞漫稿十八〕服附雜事嘉永二年印行、古風ト流布トヲ、相撲番附ニ擬スル〇中古風方ニ曰〇中丸行燈。京坂ハ今モ必ズ丸形ヲ用フ、江戸ハ専ラ角ヲ用フ、

〔花街漫録下〕たそや行燈。元祿以前よりともす事は、其角が畫賛を見てあるべし、このあんどんは、吉原町にかざりてともす事なり、元よし原の頃より仕出しけるにや、たそや行燈とぞ呼ける。〇中略

晉其角自畫賛〇圖 それよりして夜明がらすや郭公

〔嬉遊笑覽十下〕火燭今小き行燈をぼんぼりといふ、續五元集に餅の紅粉も犬子となる龍燈のかさぼんぼりは月と花、是は月花には龍燈も明らかならねば、これ龍燈のぼんぼりなるべし、燈火の覆ひをぼんぼりといひ、又茶爐の雪洞をもまかいへり、火を覆ふ事おなじければなるべし、かさぼんぼりとは、もとはさもいひしにや、

〔東都歳事記三月〕當月中、吉原仲の町往還へ櫻を植。青竹にて垣を結び、黄昏より入るは、燈